

悪い時代

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 公開日: 2021-10-19 キーワード (Ja): キーワード (En): Tohoku Gakuin University 作成者: 北, 博 メールアドレス: 所属:
URL	https://tohoku-gakuin.repo.nii.ac.jp/records/24770

悪い時代

大正宗教主任 北

博

創世記一章三節〜二章三節

31神はお造りになったすべてのものを御覧になった。見よ、それは極めて良かった。夕べがあり、朝があった。第六の日である。

1天地万物は完成された。2第七の日に、神は御自分の仕事を完成され、第七の日に、神は御自分の仕事を離れ、安息なされた。3この日に神はすべての創造の仕事を離れ、安息なされたので、第七の日を神は祝福し、聖別された。

創世記六章一〜一二節

11この地は神の前に墮落し、不法に満ちていた。12神は地を御覧になった。見よ、それは墮落し、すべて肉なる者はこの地で墮落の道を歩んでいた。

マルコによる福音書一章一四〜一五節

14ヨハネが捕らえられた後、イエスはガリラヤへ行き、神の福音を宣べ伝えて、15「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信じなさい」と言われた。

二十世紀は西暦一九〇一年に始まり、二〇〇〇年に終わりました。しかし神学思想の面から見ると、二十世紀は第一次世界大戦とともに始まった、と言われます。この考え方からは、それ以前の時代は十九世紀神学の延長と見なされます。第一次大戦を皮切りに、人類は二十世紀において、それまで経験しなかった未曾有の悪を経験します。第二次大戦とその中で行われたナチスのユダヤ人殲滅行動、そして米国の原爆投下による無差別大量殺人は、アウシュヴィッツ、ヒロシマ・ナガサキという名とともに、人間の悪の力の凄まじさをまざまざと見せつけ、それまでの人間の理性に対する信頼を完全に失わせ、人類の進歩・発展への素朴な期待をも挫折させることになりました。

第二次大戦後は、確かにこのこと反省の上に立って国際連合が作られ、またそれまで植民地だった多くの国々が独立しましたが、それまでの植民地支配に代わって旧帝国主義諸国の第三世界への経済支配が戦後世界経済の枠組みとして恒常化しているという現実があります。援助の名の下に行われる開発が引き起こす環境破壊と対外債務の増大、グローバル化がもたらす富める国と貧しい国との経済格差の拡大と文化破壊は、ますます深刻化の度合いを深めています。また、第二次大戦後米ソの冷戦時代が長く続きましたが、ソ連崩壊後は米国の一人勝ちとそれに対する反発がテロの続発を生み、更にそれに対する果てしない撲滅作戦が新たな抑圧を生み、また更なるテロを生むという悪循環、報復の連鎖を生んでいます。そして二十一世紀は、二十世紀の悪の構造をそのまま引き継いでいるように見えます。

このような絶望的な状況を、私達はどう理解し、また受け止めればよいのでしょうか。旧約聖書はこの世界を神の創造物であると教えます。そして創世記一章三一節は、神が創造世界を「極めて良い」と見たと記しています。他方、創世記六章一二節は、神が地上世界を墮落していると見たとも記しています。つまり旧約聖書は、現実の世界が悪に満ちていることは認めながらも、本来神の創造した世界はそのようなものではなく、極めて良いものである、としているのです。そして現在のこの悲惨な現実の理由を神からの離反の結果であるとして、その発端を最初の人間の神に対する背反の物語によって絵画的に描いています。

ここでもう一度、私達は確認しておく必要があると思います。それは、旧約聖書によればこの世界は本来的に悪ではないこと、その創造は善なる意志によって行われ、また絶えず善なる意志に導かれている、ということです。すなわち、この絶望的な状況は世界の本質でもなく、人類史の不変の定数として未来永劫続くものでもない。神はこの現実を決して良いものと認めていないし、まして神がそのような現実を作り出したのでもない。

マルコによる福音書一章一四―一五節によると、イエスは洗礼者ヨハネが捕らえられた後に宣教の第一声を上げ、「時は満ち、神の国は近づいた。悔い改めて福音を信ぜよ」と言ったとされています。「神の国」とは神の支配領域、つまり神の意志が行われる世界のこと、終末論的意味合いがある語です。終末論について少し説明しますと、この語には多様性がありますが、本日の話の内

容との関連で言うならば、今ある世界、その現実やあり方が、今のままで永遠に続くことは決してあり得ない、という考え方です。

イエスは、権力者の不正を批判したヨハネが逮捕されるといふショックな事態になった時、「時は満ちた」と言つて宣教活動を開始しました。「悔い改め」とは一八〇度転回すること、つまりそれまでのあり方の全面的変更です。「福音」とは神の国の接近という良い知らせ、「信じる」とはこの場合、単に心の中だけのことではなく、体全体で中に入ること、つまり参加への奨めも含んでいるのではないでしょうか。イエスは最悪と見える状況下で、神の意志が行われる世界は近いと言つて、その建設への参加を呼びかけたのです。

私達は、状況が救い難く見える時にも決して絶望して逃避的になつてはならず、また「これが残念ながら世の本質だ」と言つて悟りすましてもならないのです。現在の私達の世界は、神の意志とは程遠い絶望的な状況にあるかもしれない。しかし、これが本来の姿ではなく、このまま終わることもない。神からの離反によつて悪はますます増大しているが、まさにそのような時こそが、神の意志が行われる世界の接近を、つまりそのような世界の実現可能性を伝え、その実現を目指す行動へと参加するのにふさわしい時なのです。

私達は、神の宣教、つまりミッションへと招かれています。宣教とは召命を受けて派遣されることであり、派遣の際に携える使命です。私達の宣教とは、神の意志が行われる世界、つまり正義と

平和と被造物の保全が行われる世界を告げ知らせ、悪に対して告発し、世に変革を迫ることです。それが私達一人一人に課されている使命、つまりミッションなのです。